

自分探しのひとり旅

芦原伸

自分はどこから来て、どこへ行くのだろうか？

人は誰しも年齢を経るにしたがい、来し方、行く末を思うようになるものだ。

私は三重県に生まれ、名古屋で育ち、神戸の伯父のところへ養子にゆき、大学は札幌へ。職を得てのち半世紀は東京に暮らしており、故郷がどこだか分らぬデラシネ（根無し草）である。ところが本籍地は京都府京丹後市峰山町で、ここが私のルーツなのである。丹後は育ったところでもなく、これまで暮らしたこともない。

去年、丹後へひとり旅立った。自分探しの旅である。

丹後は昨今、海の京都として人気があるようだ。伊根の「舟宿」や琴引浜の「鳴き砂」が注目されている。かつては「裏京都」と呼ばれた。鬼の住む大江山を越え、



先祖の墓参り。各地を転々として生きてきた著者にとって京都府京丹後市こそがルーツだった。

日本海に面した辺境の地である。私にとっては先祖の墓があるだけの遠い国であった。

丹後へひとり出かけたのは祖先の血が私を呼んだのかもしれない。

丹後半島を一周した。半島は山あり海あり、棚田あり、離島ありと変化に富み、古代の歴史を秘めていた。

かつてここには幻の「丹後王

国」があったことを知った。

半島には古墳が多く、京都府の古墳の七割がこの地にあるという。また、たたら製鉄、絹織物（あしぎぬ）、酒造が盛んで、一大王国を築き大和王朝と拮抗していた。古代、日本海は表玄関で大陸（半島）と直結していたからである。丹後風土記に残る羽衣天女、浦島太郎・乙姫の伝説がそれを裏付けている。

この地に元伊勢神社がいくつもあることも興味をそそった。伊勢神宮が出来る前に天照大神はこの地に鎮座し、丹後の女神・豊受姫（とようけひめ）を伊勢に呼んだとされ、豊受姫は今も豊受大神として伊勢神宮の外宮に祀られている。つまり大和王朝が丹後王国を取り込んでいった、あるいは滅ぼしていった、という歴史興亡のロマンを物語っているのだ。

半島をゆけばあちこちに「丹後七姫」の看板が目についた。

羽衣天女、乙姫、間人皇后（聖徳太子の母）、和泉式部、細川ガラシャ、静御前、安寿姫の七姫で、いずれも時代の波に巻き込まれた悲恋、悲運の伝説の女性らである。丹後は歴史に翻弄され滅ぼされた悲しい国であった。都から遠い辺境という壁が悲運を招いたのであった。

名古屋で医院を開業していた父親は生まれ育った丹後から蟹やひものを取り寄せて、酒を飲みながら、故郷の話をしたものだった。少年の私は話より食いが先立ち、よく覚えていなかったが、父親は忘れがたい故郷を息子に伝えておきたかったのだろう。

峰山で祖先の墓を詣でた。

寺の和尚に過去帳を見せてもらうと、わが祖先は江戸宝暦年間（18世紀）から代々京極家に仕えた武士だった。なかでも祖父は軍人をめざし、かの乃木希典（のぎまき）の副官となって活躍し、故郷では「將軍」

と呼ばれ名誉村長も引き受けたという。

故郷のなかった私になにやら丹後の風と土の匂いが戻ってきた。私が生涯辺境の旅にこだわってきたわけが解けたのであった。わが故郷の辺境の血がわが身のなかで騒いでいたのである。



①伊根漁港の朝。水揚げされた魚を種類別に分けていく。②伊根湾沿岸に軒を連ねる船倉兼民家。「伊根の舟屋」として知られている。③民宿の朝食。



故郷のなかった私になにやら丹後の風と土の匂いが戻ってきた。

間人（たいざ）にある立岩。大江山の鬼を封じ込めたという伝承が伝わる巨大な一枚岩。

旅の一枚

京都福知山の元伊勢内宮皇大神社

福知山市大江町の元伊勢内宮と元伊勢外宮は、伊勢神宮の元宮とされ、天岩戸神社とともに元伊勢三社として知られる。元伊勢内宮は伊勢神宮より54年も前に大和地方から天照大神のご神体を遷して4年間祀ったといわれている。

